

社会科部会	学校名	つくば AZUMA 学園 つくば市立吾妻小学校
	職・氏名	教諭・大山 喜裕

## I 自己の研究テーマ

思考力・判断力・表現力を育成するための社会科学習指導の在り方  
ー社会的事象の因果関係についてまとめていく言語活動と ICT を用いた評価を通してー

### 1 主題設定の理由

平成 26 年度茨城県学校教育指導方針では、児童の思考力・判断力・表現力の育成を目指した言語活動の充実の必要性が指摘されている。

昨年度実施された本校児童の茨城県学力診断のためのテスト結果を見てみると、知識・理解に関わる問いの正答率は、\*%以上となっており、社会的事象に関わる知識の定着をうかがうことができる。一方、思考力に関わるある問いの正答率は、約\*%と相対的に低くなっており、社会的事象に関する思考力に課題を見出すことができる。さらに、本校 6 学年の児童、\*名を対象に行った「社会科で得意なことは何ですか?」というアンケート(H\*.\*.\*実施)結果を見ても、「理由や原因を考えること」「何通りもの考えを出すこと」を得意・やや得意と答えた児童の割合は\*%となっており、\*%以上であった「本やインターネット、インタビューなどで調べること」や「大事な言葉を覚えること」を得意・やや得意と答えた児童の割合を下回った。

以上より、思考力・判断力・表現力を育成するための社会科学習指導の在り方を究明していくことは意義があると考えられる。

### 2 研究のねらい

社会的事象の因果関係についてまとめていく言語活動と、タブレット学習システムを活用した座席表評価を通して、思考力・判断力・表現力の育成をめざす社会科学習指導の在り方を明らかにする。

### 3 研究の仮説

社会的事象の因果関係についてまとめていく言語活動を取り入れ、また、ICT を用いて座席表評価を改善した社会科授業を実践していけば、思考力・判断力・表現力を育成できるであろう。

### 4 仮説の検証方法

第一に、社会的事象の因果関係についてまとめていく言語活動と、学習評価における ICT 活用を取り入れた思考力・判断力・表現力の育成をめざした社会科授業を構想し、つくば市立吾妻小学校第 6 学年\*組\*名を対象に、7 月に実践する。

第二に、実践で得られたデータを到達度・達成度の観点から数量化し分析する。また、教師のかかわりとそれを受けた児童の変容を質的に分析することで、今回の言語活動と ICT 活用を取り入れた実践が有効であったか分析していく。

### 5 研究の内容

#### (1) 基本的な考え方

##### ① 思考力・判断力・表現力について

社会科の目標は、社会的事象に関する知識をもとに考え、判断し、表現していく公民的資質の育成にある。つまり公民的資質は、知識を基盤にして達成されるものであるといえよう。ただし、知識は、個別に分断・細分化された状態ではなく、互いに連結・統合されたものとして定着させていくことでより強固なものとなっていくものである。この連結の鍵の一つは、社会的事象の因果関係にある。したがって、本研究における「思考力・判断力・表現力」は、「社会的事象の因果関係について仮説を構成していく力」であると定義することができる。

## ② 思考力・判断力・表現力を育成することについて

「社会的事象の因果関係について仮説を構成していく力」は、習得される知識の深さ・広さによって保障され、向上していく。なぜなら、社会的事象の根拠の量的・質的拡大によって、仮説は客観性を帯び、説得力を増していくからである。そして根拠の量的・質的拡大は、資料に触れることや様々な他者の考えに触れることで促されていく。したがって、本研究における思考力・判断力・表現力は、「実物などの資料や他者の意見に触れ、社会的事象の因果関係を理解させていくことで育成できるものである」と考えられる。

## ③ 社会的事象の因果関係についてまとめていく言語活動について

文部科学省の言語活動の充実に関する指導事例集によると、言語活動には(1)知的活動(論理や思考)に関することと、(2)コミュニケーションや感性・情緒に関することの二つが挙げられる。前者に関しては、「What」「Where」「Who」「When」といった一問一答型の問いを効果的に活用しながら、社会的事象の因果関係に着目できるよう「How」「Why」などの問いを中心に据えていくことで実現していく。また、後者に関しては、意見を伝え合う場面を設定していくことで実現していく。したがって、本研究における言語活動は、「なぜ?という課題について児童が自分の考えを作成し、それに基づいて意見を伝え合う活動である」と定義することができる。

## ④ 学習評価における ICT 活用について

社会科における ICT 活用の在り方の多くは、「情報収集や提示、保存のためのツールとしての活用」となっており、これらとは異なったアプローチが求められている。そこで、本研究において着目するのが、ICT 機器を活用している実践事例が少ない学習評価である。本研究では、社会科における学習評価として著名な「座席表評価」を取り上げる。座席表評価とは、築地久子ら「社会科の初志をつらぬく会」によって実践されたもので、児童一人一人の思考の変容を見取り、個別指導に生かしていく評価である。座席表評価に注目する理由としては、ICT 機器によって座席表評価にかかる膨大な労力を軽減することができると考えたためである。したがって、本研究における ICT 活用は、「学習評価支援のためのツールとしての活用」とであると定義することができる。

## (2) 主題に迫るために

### ① 児童の実態について

本校の児童が、「社会的事象の因果関係について仮説を構成していく力」を身につけているか、実態調査を本校 6 学年の児童、\*名を対象に行った。

「社会科で得意なことは何ですか?」というアンケートでは、「身の回りのことから疑問を見いだすことができる」「理由や原因を考えること」「何通りもの考えを出すこと」を得意・やや得意と答えた児童の割合は\*%となっており、「本やインターネット、インタビューなどで調べること」や「大事な言葉を覚えること」を得意・やや得意と答えた児童の割合\*%を下回った。

したがって、「社会的事象の因果関係について仮説を構成していく力」、すなわち「思考力・判断力・表現力」を育成するための社会科学習指導の在り方を明らかにしていくことには意義があると考えられる。

### ② 社会的事象の因果関係についてまとめていく言語活動を展開していくために

研究誌『社会科研究』や長谷川康夫氏の論考を参考に、以下の条件に照らし合わせて教材を選定していくこととする。

#### ア 児童にとって時間的、空間的に関わりのある教材の選定

時間的に関わりがあるということは、児童が今後も関わっていくことが予想される内容であるということである。また、空間的な関わりがあるということは、児童にとって身近な問題であるということである。これにより、意欲的な学習を喚起することができる。と考える。

## イ 普段は疑問をもたないで見過ごしている教材の選定

「社会的事象の因果関係について仮説を構成していく力」を育成するために、日頃は疑問に感じないで見過ごしている内容をあえて取り上げる。これにより、「なぜ？」という視点で身の回りを注意深く見ていく力を育成できると考える。同時にこれは、普段は疑問をもたない分、改めて考えると「なぜだろう？」という疑問が湧き上がってくる内容でもあり、児童の「ハテナ？」を活性化させ、児童の表面的な知を揺さぶっていく上で有効な視点であると考えられる。

### ③ 学習評価における ICT 活用をしていくために

#### ア 活用する機器概要

シャープビジネスソリューションズ、タブレット学習システム「STUDYNET」を活用する。これはタブレットと大型スクリーンによる学習システムである。児童が一人一台のタブレットで表現したものを双方向で吟味していくことができる学習システムである。児童の持つタブレットはタッチペンで直感的に書き込むことができるようになっている。

#### イ 学習評価に活かしていく具体的な機能

本研究においては、本学習システムの中でも「授業履歴機能」を有効に活用していく。これは、児童がタブレット上に作成した文章、作品をエクセルデータとして保存することができる機能であり、ワークシートの収集などの時間的コストを大幅に削減し、スムーズに評価を行っていけると考える。なお、児童の回答はエクスチェンジボードとタッチアナライザーという機能を用いて集約していく。エクスチェンジボードとタッチアナライザー機能を活用すると、大型スクリーンへの全員の意見集約、提示が非常に簡単に行うことができる。

### (3) 研究の実践

#### ① 単元名 「社会を見る目をレベルアップ！デパートのひみつ編」

#### ② 目標

- デパートに窓が少ないことについて疑問をもち、意欲的に追求しようとすることができる。(関心・意欲・態度)
- デパートに窓が少ない理由について、見学や調査活動を通して、自分の考えをまとめることができる。(思考・判断・表現)
- デパートに窓が少ない理由について、周囲の店と比較して調査することができる。(技能)
- 売り上げを上げるために建物の構造の工夫があることを理解することができる。(知識・理解)

#### ③ 単元(題材)設定にあたって

本単元「デパートのひみつ」は、小学校第3学年の単元「はたらく人とわたしたちの暮らし」における「お店ではたらく人」を発展させた特設単元である。

社会科の教材づくりの視点として、「人・モノ・コト」が挙げられるが、働く「人」に着目したものが第3学年の内容であると言えよう。本単元では、「モノ」に着目して教材化を試みた。具体的な「モノ」とは、「窓が少ないデパートの構造」である。

「窓が少ないデパートの構造」を教材として選定した理由としては、本校の近くにデパートがあり、児童にとって身近な内容であるからである。また、普段「窓が少ないデパートの構造」について意識する機会はなく、多くの大人も見過ごしている内容であり、疑問を喚起しやすい内容であると考えたからである。これは教材選定の条件を満たすものであると言えよう。(別添資料2)

なお、「窓が少ないデパートの構造」の理由は、「お客に、買い物に集中してもらおう」ということが挙げられるが、これは、『「造り」が工夫されていることで、私たちの行動が誘導されることがある。』という社会一般法則にまでつながる内容である。これは、「民主主義という政治体制(こと)のもとで、我々は平和的民主的な投票行動などを行っている」という中学校公民的分野に関わる事象や、「社会・文化によって、われわれのモラルが規定され、行動に影響を及ぼす」という高等学校倫理に関わる事象につながっていく視点である。

以上より、「デパートのひみつ」を教材化し、実践していくことには意義があると考えられる。

(4) 指導と評価の計画

① 単元計画 (時間数は4時間とする。以下は、その具体的な流れである。)

時	学習内容・活動	関	思	技	知	・評価規準
1	お店はどんな工夫をしていたか、復習する。				○	・第3学年の既習事項を理解している。 (記述)
2	実際に****に行き、お店の特徴を見学してくる。	○				・意欲的にデパート見学をしている。 (観察・記述)
3	窓が少ないことなど、気付いたことや疑問に思ったことを発表する。		○	○		・疑問に思ったことについてまとめている。 (記述)
④	なぜ窓が少ないのか考える。(本時)		○			・売り上げを上げるために建物を工夫していることについて考えている。(発表・記述)

② 本時の目標

デパートに窓が少ない理由を考えていく活動を通して、商業施設の建造物の構造は、売り上げを上げるために工夫されているということを考えることができる。

③ 本時の展開

学習活動・内容	指導上の留意点 ◎評価
1 前時の振り返りを行う。 2 学習課題を確かめる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;">なぜ、デパートには窓が少ないのだろう？</div> 2 自分の考えをまとめる。 <b>【予想される児童の反応】</b> ○中を見えないようにするため。 ・中を見えなくして、興味を引くため。 ○外を見えないようにするため。 ・他のお店に興味をもたないようにするため。 ・時間を分らないようにするため。 ・天気を分らないようにするため。 ・明るさを分らないようにするため。 ○買い物に集中できるようにするため。 ○売上げを伸ばすため。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ、デパートには窓が少ないのだろう？という問いに関しては、複数のデパートの写真を提示するなどして前時の段階で確認しておく。</li> <li>・児童にとって身近な事例であるデパートを例に挙げて興味・関心を高める。</li> <li>・時間を十分にとり、他人に説明することを前提に自分の考えをまとめさせる。</li> <li>・タブレットに意見を書き込むように指導する。</li> <li>・随時、タブレットに記入された児童の意見を確認し、記述内容を把握しておくよう留意する。書き込むことができない児童には随時支援していく。</li> <li>・全くかけない児童には、「お客さんは窓の外から何を情報として手に入れている？」(天気・時間・明るさ)「時計売り場の時間は一致してないけれど、これも関係あるよ。」(時間)「窓がないとお客さんにどんな影響がある？」(天気が分らない・日の入りが分らない・時間が分らない)「天気や時間、暗くなっているかどうか、これらをお客さんが分からないことで、お店は得することあるの？」(お買い物に集中できる)などの補助発問を用意しておき、必要に応じてアドバイスする。</li> <li>・全員の意見を集約し、①～③の順番で発表させながら、お互いの意見を吟味できるようにする。</li> <li>・児童の意見やつぶやきを大事にしなが、児童の考えをつなぎながら授業を進めていく。</li> </ul>
3 考えを発表する。 <b>【共有する児童の反応】</b> ①外を見えないようにするため。 ・他のお店に興味をもたないようにするため。 ・時間を分らないようにするため。 ・天気を分らないようにするため。 ・明るさを分らないようにするため。 ②買い物に集中できるようにするため。 ③売上げを伸ばすため。	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎窓が少ない理由について考えている。 (発表・スタディネット記述)</li> </ul>
4 学習の感想を書く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習内容について意識していたか確認し、無意識に方向付けされていることを確認する。</li> <li>・普段は意識していないが、『「造り」の工夫によって、私たちの行動が誘導されることがある。』ことについて、感想を書かせる。</li> </ul>

## 6 成果と課題

### (1) 言語活動と ICT 活用を取り入れた指導の結果について

#### ① 数量的分析

事前・事後評価によって児童の到達度・達成度を分析していくことで、社会的事象の因果関係をめぐる言語活動と座席表評価への ICT 活用が有効であったか分析していく。

#### ア 到達度評価

ルーブリックを用いて児童の解答の到達度を質的に段階化し、その調査内容を数量化していく。つまり、「社会的事象の因果関係について仮説を構成し、伝え合う力」について児童がどこまで高い段階に到達したかを分析していく。

用いたルーブリックおよび、各段階の児童の人数を示したものが表 1 である。知識量については工夫に関する記述の数で評価し、因果関係をめぐる思考については、窓がない理由について説明できているかどうかで評価することを意図し、作成したものである。

表 1 ルーブリックと到達度評価

段階	・評価基準	人数変化 (事前→事後)
0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お店の工夫について、記述していない。</li> <li>・記述しているが、内容の客観性が保たれていない。</li> </ul>	*名→*名
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お店の工夫について、1つ以上記述している。</li> <li>・既習事項や、資料などで確認可能な客観的な事実を記述している。</li> </ul>	*名→*名
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お店の工夫について、3つ以上記述している。</li> <li>・既習事項や、資料などで確認可能な客観的な事実を記述している。</li> </ul>	*名→*名
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お店の工夫について、3つ以上記述している。</li> <li>・既習事項や、資料などで確認可能な客観的な事実を記述している。</li> <li>・窓がない理由について、売上げの増加に着目して言及している。</li> </ul>	*名→*名
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お店の工夫について、5つ以上記述している。</li> <li>・既習事項や、資料などで確認可能な客観的な事実を記述している。</li> <li>・窓がない理由について、売上げの増加に着目して言及している。</li> </ul>	*名→*名

(発表者作成)

結果からは、以下のことが指摘できる。

段階 4 に到達している児童が\*%以上にのぼっている。多くの児童が高い段階に到達することができていることが伺える。窓がない理由について、売上げの増加に着目して言及している段階 3 以上の児童は、\*%にのぼった。この段階 3 以上の児童は、本研究で目指すべき児童の姿である。これが\*割を上回ったということは、前向きにとらえたい。

以上より、言語活動と座席表評価への ICT 活用を導入した社会科学習指導は、思考力・判断力・表現力を育成する上で有効に作用したことが指摘できる。

## イ 達成度評価

児童一人一人の到達度の比較から達成度を「深化」「変化せず」「後退」に分類し、児童の認識がどのように変容したか質的な変化を数量化して分析を行っていく。「深化」とは、事前評価に比べ、事後評価の認識のレベルが上がっていることを意味する。「変化せず」とは、事前評価と事後評価の認識のレベルの変化がなかったことを意味する。「後退」とは、事前評価に比べ、事後評価の認識のレベルが下がっていることを意味する。これを示したものが表2である。

表2 到達度の変化と達成度評価

達成度	到達度の変化と人数	人数合計
後退	1→0 0名	0名
	2→0 0名 2→1 0名	
	3→0 0名 3→1 0名 3→2 0名	
	4→0 0名 4→1 0名 4→2 0名 4→3 0名	
変化せず	0→0 0名 1→1 0名 2→2 0名 3→3 0名 4→4 0名	0名
深化	0→1 *名 0→2 *名 0→3 *名 0→4 *名	*名
	1→2 *名 1→3 *名 1→4 *名	
	2→3 *名 2→4 *名	
	3→4 *名	

(発表者作成)

達成度評価から以下のことが指摘できる。

100%の児童が「深化」している。つまり、もともと獲得していた知識にとどまるのではなく、授業を通して成長していったことを示している。さらに、2段階以上の深化が見られた児童は\*名で、\*%であった。また、後退させた児童は見られなかった。

以上より、言語活動と座席表評価へのICT活用を導入した社会科学習指導は、思考力・判断力・表現力を育成していく上で有効に作用したことが指摘できる。

## ② 質的分析

数量的な分析を踏まえ、児童の記述や授業での発話や討論の記録の内容を解釈していくことで、授業実践を分析していく。

### ア 因果関係についてまとめていく言語活動の分析

#### (7) 効果的な問題意識の喚起

児童が記述した見学記録を分析すると、\*名(\*%)の児童が、「ガラス張りが少ない」「外からだ店の中は見えにくい」「中が見えない」等、デパートの構造上の特徴に気付くことができた。本単元の主発問につながる重要な特徴を、児童に認識させることができた。この児童の気付きがなくては、本単元そのものが教師からの一方的な押しつけになってしまいかねないだけに、本単元の核となる「窓が少ないデパート」という構造に\*名の児童が気づけたことは、大変重要なことであると考えられる。

特に、児童\*は、単元の第1時の時点では、先のループリック評価で「段階0」であったが、この見学で「(外に)あんまりみせていない(原文ママ)」という点に気付き、最終的にデパートの構造上の工夫に言及した記述をみせ、「段階3」の評価にまで到達している。単元終了後の感想文でも「いつもの日常の中にいろいろなお店や人たちの工夫があって無意識という言葉の恐ろしさも知りました。」と、本単元の本質に迫る記述をしていた。

これは、児童にとって身近な教材、日頃は疑問に感じない教材をあえて取り上げることで、児童の意欲的な学習が喚起されたことを意味するものであると前向きにとらえたい。

以上より、因果関係についてまとめていく言語活動を導入した社会科学習指導は、思考力・判断力・表現力、つまり、本研究で指摘するところの「社会的事象の因果関係について仮説を構成していく力」を育成していく上で、有効に作用したことが指摘できる。

#### (イ) 教材の本質に迫る感想内容

本教材の本質は、社会というよりマクロな構造に無意識に埋没するのではなく、社会的事象の因果関係を鍵として、建設的かつ、批判的にそれらを認識していくことができる市民的資質を育成することにある。したがって、最終的には「デパートの構造理解」とどまる内容ではない。そこで、児童が記述した感想文から、「デパートの構造理解」を超えた内容の記述を確認した。すると、\*名(\*%)の児童が、デパートの構造にとどまらない内容を記述していた。

児童\*は、「決まりのようでやっている事を、「なんでだよ！」と考えることが大切だということが分かった。」と述べているが、同様の内容は児童\*の「気づくことが大事」という記述にも認められる。これは、児童が学習を通して、知識を獲得しただけでなく、見方・考え方も獲得したためであると考えることができよう。

さらに、児童\*は、「自分では気付かないうちに誘導されていることがあるということにおどろいた。」と記述し、児童\*は「社会のうらのことがよく分かった。」と記述している。これは、「デパートという個別具体的な事象にとどまらず、身の回りの多くのことに同様の「無意識」があるはずだ」という児童の考えを反映した記述であると読み取ることができる。

以上より、因果関係についてまとめていく言語活動を導入した社会科学習指導は、思考力・判断力・表現力を育成していく上で、有効に作用したことが指摘できる。

### イ 学習評価における ICT 活用の分析

#### (ア) 知識の共有

教師は単元を通して児童たちに対し、ICTを活用して自分の考えまとめ、発表することを指導してきたが、児童が他の児童の考えを聞いて、新たな疑問を抱き、時に新たな考えを取り入れることができていた。全体への投げかけに関しては、教師だけではなく、資料写真のように児童が「児童Aの作品が見たいです。」などと申し出て、話し合いの起点になる場面も見られた。これにより、主体的な意見交流が図られ、社会的事象の因果関係について効果的に学習していくことができた。

以上より、座席表評価へのICT活用を導入した社会科学習指導は、思考力・判断力・表現力を育成していく上で有効に作用したことが指摘できる。

#### (イ) 教師の負担の軽減

評価のために、児童の記述を教師が文字起こしをし直したり、一覧表を作成したりする手間を大いに省くことができた。これにより、時間的な負担が大きく軽減された。

以上より、ICTを座席表評価に組み込んだ社会科学習指導は、思考力・判断力・表現力を育成させるだけでなく、様々なコストを削減する上でも有効に作用したと考える。

### (2) 成果

第一に、思考力・判断力・表現力を育成する社会科学習指導の在り方を提案することができたことである。

第二に、思考力・判断力・表現力を育成するための言語活動とICT活用の導入の有効性について理論的提案で終わるのではなく、具体的な授業を実践できたことである。

第三に、授業を実施した事実だけで終わるのではなく、有効性を実証的に検証できたことである。

### (3) 課題

第一に、実践された社会科単元、授業が1クラスだけであり、データとして今後積み重ねを要することである。

第二に、今回、評価することができた思考力・判断力・表現力は、因果関係に着目したものであり、限定的であったということである。

第三に、言語活動の工夫とICT活用を通じた評価の工夫がそれぞれ具体的にどの成果につながったのか、明らかにできなかったことである。

第四に、数量的評価において段階1・2に留まった児童が見られたことである。

## II 授業を行う上での課題について

先に挙げた本研究の課題は、今後筆者が取り組んでいくべき研究の方向性を指し示すものであると言えよう。以下に示す4点が、現段階における今後の課題である。

第一に、他の単元、クラスでも思考力・判断力・表現力を育成する指導の在り方を模索していくことである。

第二に、思考力・判断力・表現力など、可視化しづらい力を分析していくための評価方法を模索していくことである。パフォーマンス評価などを手がかりに、より細かく児童の活動を可視化、評価しながら、研究を進めていきたい。

第三に、どの手立てがどの力に結びついたのかをより詳しく分析していけるよう授業評価の精緻化を図っていくことである。

第四に、全ての授業参加者の成長を促していけるよう更に細やかな指導の在り方を模索していくことである。今回はICTを用いて児童の実態把握に努めたが、これをさらに発展させた実践に挑戦していきたい。

### <主要参考文献>

- ・茨城県教育委員会『平成25年度学校教育指導方針』茨城県教育センター，2013年。
- ・唐木清志『子どもの社会参加と社会科教育-日本型サービスラーニングの構想-』東洋館出版社，2008年。
- ・築地久子『生きる力をつける授業』黎明書房，1991年。
- ・森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書，1984年。
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説社会科編』教育出版，2008年。
- ・文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集』教育出版，2012年。
- ・渡部竜也，山田秀和，田中伸，堀田悟『教師のゲートキーピング』春風社，2012年。
- ・渡辺竜也「社会問題提起力育成のための授業構成の理論と方法-初等教育と中等教育の授業開発を踏まえて-」全国社会科教育学会第62回全国大会第4分科会自由研究発表資料，2013年。